4．体験学習プログラム
～国際社会や地域の課題に目を向け、視野を広げる～

ボランティア・NPO 活動センターでは、学生が夏と春の長期休暇期間を利用して、国内の地域や治安・衛生環境が安全と判断される海外を訪問し、その地域が抱える問題に触れるとともに、地域貢献、福祉、環境関連の現地 NPO・NGO などとの交流を通して、その課題解決の取り組みなどを学ぶ「体験学習プログラム」を実施しています。

2022年度も新型コロナウイルス感染症の影響はありましたが、出来るだけコロナ禍以前に戻そうという機運が高まる中、感染対策を講じながらの実施となりました。しかし、海外への渡航を伴うプログラムの実施は困難な状況にあり、国内において実施しました。

国内体験学習プログラムでは、新型コロナウイルスの感染拡大のため延期となった2021年度分の福島スタディツアーを 8 月に振替実施しました。また、2022年度分は 2 月に予定通り実施しました。

海外体験学習プログラムの夏季プログラムでは、滋賀のコーヒー農園と JICA 関西に協力いただき、コーヒー栽培を通して様々な国際問題について学ぶ企画を展開しました。また、春季プログラムでは、2021年度実施したアフガニスタンについて取り上げ、政変後におけるアフガニスタンその後状況や様々な問題について学ぶ企画を実施しました。

事　業　名	福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～
実施日程	事前学習会：2022年7月22日（金）14時00分～15時00分 スタディツアー：2022年8月6日（土）～10日（水） 事後学習会：2022年8月29日（月）11時00分～12時30分
場　　所	福島県福島市、南相馬市、浪江町、双葉町など
参加人数	学生 8 名、教職員 2 名　合計10名
参加学生	辻元一貴（国際4）　河部蒼眞（先理3）　伊野涼雅（政策3）　太田雄斗（文学2） 図師菜々香（社会2）　中村あや（社会2）　成川雅妃（社会2）　田村勝哉（政策2）
協力者・団体	特定非営利活動法人うつくしまブランチ、特定非営利活動法人さぽーとセンターぴあ、社会福祉法人南相馬市社会福祉協議会、特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ、阿部農園、農家民泊いちばん星、株式会社小高ワーカーズベース

1. 目的

ボランティア・NPO 活動センターが実施する国内体験学習プログラムは、学生が、該当地域の地域住民や NPO／NGO との交流を通じて、国内におけるその地域の抱える問題に触れるとともに、ボランティア等の体験学習を行うことにより、より深く社会の問題について考え、その問題解決に向けて自身の問題として考えるきっかけを作ることを目的としています。

「福島スタディツアー」は2015年に開始し、以降、福島県の NPO 訪問や地元住民との交流､町のフィールドワーク等を通して、津波・地震・原子力災害という複合災害が引き起こした課題と、そして課題解決に向けて市民がどのような活動を展開してきたのかなどについて、実際に現地を訪問して体感的に学んでいます。

2. プログラム内容

※コロナ禍のため、2021年度実施予定だったツアーを、2022年８月に振替実施しました。

（1）事前学習

①東日本大震災～福島の状況について～
筒井ボランティア・NPO 活動センター長のお話

②「小高ワーカーズベース」の挑戦
株式会社　小高ワーカーズベース
代表取締役　和田智行氏のお話（動画視聴）

（2）福島スタディツアー
2022年８月６日（土）～８月10日（水）

● １日目：８月６日（土）
・深草キャンパスを8時00分に出発、20時00分前に福島県広野町にバスで到着

● ２日目：８月７日（日）
・東日本大震災・原子力災害伝承館を見学し、語り部さんのお話
・一般社団法人ふくしまリアリの菅野さんの案内で双葉町～浪江町周辺をフィールドワーク
・昼食：道の駅　なみえ
・震災遺構 請戸小学校の見学
・南相馬市に移動し、NPO 法人さぽーとセンターぴあ代表理事の青田さんから震災直後の福祉現場の様子やその経験を活かした現在の取組み、「てんでんこ」の考え方についてお話
・一日のふりかえり

● ３日目：８月８日（月）
・農家民泊いちばん星を見学後、星さんの案内で南相馬市内にある海岸沿いの集落跡の慰霊碑や北泉海岸、相馬野馬追のメイン会場である雲雀ヶ原祭場地、相馬野馬追で活躍する厩舎などを見学
・昼食：里山キッチン
・南相馬市社会福祉協議会を訪問し、地域福祉課の佐藤課長から、現在の南相馬市の様子や震災直後のことなどについてお話を伺う。
・福島市に移動し、NPO 法人 市民公益活動パートナーズの方から、震災直後から現在までの活動などについてお話
・一日のふりかえり

● ４日目：８月９日（火）
・福島市の梨農家・阿部農園を見学。震災後に実施した安全な食べ物を提供するための取組みなどについてお話
・土湯温泉に移動し、昼食兼自由時間
・NPO 法人うつくしまブランチの方々から、震災前・後の活動についてお話
・４日間全体のふりかえり
20時30分に京都に向け土湯温泉を出発

● ５日目：８月10日（水）
朝7時00分頃　京都駅を経由し、深草キャンパスに到着・解散

（3）事後学習
レポートの提出と事後アンケートへの回答など事前に整理してもらった上で事後学習を実施しました。
帰京後、改めて考えたこと、取り組んだこと等について一人ひとり発表して共有し、報告会で参加者に伝えたいことについて話し合いました。
※対面実施（一部オンライン参加）

（4）感染予防対策として、次の①～⑤を実施しました。
①２週間前からの健康観察、②活動期間中毎日検温、③手指消毒、マスク着用、黙食等、④シングルルームでの宿泊、⑤出発前日の抗原検査実施

3. 学生の報告

辻元　一貴（国際学部　４年次生）

福島の現状を肌で感じ、知りたいと思ったのでこのスタディツアーに参加した。特に福島の復興はどこまで進んでいるのか、放射線の影響はどうなのか、福島の方が感じたことなどに注目していた。１日目の広野町の宿から出発して大熊町に入ったあたりから衝撃的だった。震災当時のままの建物を見たのは初めてで、震災の威力とまだ撤去ができない福島の現状に衝撃を受けた。また、放射線の影響は浜通りの原発周辺と飯舘村方面だけだと思っていたのに、福島市でも除染を行なっていたという話には驚いた。福島市で梨農園をされている阿部農園さんでは

除染作業や安全証明のための苦労を聞かせていただいた。農家や漁師の安全のための苦労に対して、消費者は福島産を簡単に避けられる。福島産を避けるなとも同情で買うべきとも思わないけど、少しでも知る努力をして責任ある消費ができる社会になってほしいと感じた。

河部　蒼眞（先端理工学部　３年次生）

福島に入って直ぐに驚くことがありました。山道などによく置いてある気温を示す電光掲示板、これが良く見ると空気中の放射能を示す線量計だったからです。なにより驚いたのは道の駅の食堂の前にこの線量計が置かれていることです。町に溶け込んでいました。他にも津波で流された場所に建てられたソーラーパネル。これらを見ていると復興とは何なのか分からなくなりました。

今回のスタディツアーで一番強く感じたのは、情報リテラシーの重要性です。これは、病院でのトリアージのような裏話や孤独死が起きると大きく報道されるという話から感じました。育児放棄の親の子供が死ぬと、関連機関の見守り不足では？というニュースが流れます。週３回しか訪問していなかったというニュース、これを自分に置き換えると週３回家に訪問してくる機関に対して不足と感じますか？このようにどうしても報道をそのまま受け取ってしまうことが多いです。情報を沢山集めて情報を吟味することが大切だと感じました。この時、メディアだけでなく実際に自分で現地に赴くなど色んな情報源が必要だと強く感じました。

伊野　涼雅（政策学部　３年次生）

私が最も印象に残ったことは、震災遺構である請戸小学校である。請戸小学校の見学では、その建物の悲惨な状況から津波の恐ろしさを痛感することとなった。その一方で、教職員を含めた学生全員が誰ひとりとして津波被害に合わず生還したことが、なぜ奇跡といわれるようになったのかを肌身で感じ、「危険を想定することの大切さ」を実感した。そして、自分と同世代の人たちが書き綴った文集「うけど」を見て、自分の生き方を考えさせられたとともに、生きる活力を分け与えてくれたように感じた。そして、その生きる活力というのは見方を変えると、福島復興の原動力なのではないかと考えるようになった。総じて、福島スタディツアーでは、沢山の学びや発見を得ることができた。現地の方々から震災や復興そして福島の今について、リアルなお話を聞いたことで、今なお解決に向けて取り組まれている課題が想像以上にあることを知った。加えて、福島が身近に感じるようになったとともに、福島がとても魅力的な場所だと気づくことができた。

太田　雄斗（文学部　２年次生）

2022年８月、福島でのスタディツアーに参加した。５日間で福島県のいくつかの街を訪れ、現地に住む方からお話を伺った。

参加する前私は、福島について「日本のいまが詰まっている場所」と感じていた。現地に行き実態に触れたとき、その思いはさらに強まった。今年３月には福島県沖地震が発生した。南相馬市では被害にあった箇所が複数あった。事態が発生する前だからこそできる備えがある。過去の教訓を今後に活かさなければいけないと感じた。研修では津波被害についても学んだ。小学校には、建物等に津波の形跡が刻まれていた。津波の威力を目の当たりにし、その恐ろしさを知った。

大震災では原子力災害も発生した。双葉町等には今も数多くの立ち入り制限区域があった。11年経った復興の現実を見た。このように、福島県は日本の現状が詰まった場所だと感じた。そしてそこから日本の社会問題を少しでも解決するためのヒントを見つけたいと考えた。

図師　菜々香（社会学部　２年次生）

今回の福島スタディツアーで最も印象に残っているプログラムとして、原子力災害伝承館の施設見学、双葉駅、請戸小学校の見学が挙げられる。この３つを見学したことから、震災前の福島県についてや原発事故以降の風評被害について、津波の恐ろしさなどについて深く学ぶことができた。また、福島県には11年たった今でも帰還困難区域であり人が入れないことから復興が未だにできていない地域があることも学んだ。しかし、双葉町のように、見る人が少しでも気分の上がるような絵を建物に大きく描くという形の復興がされていることを学び、とても良いなと感じ心に響いた。11年前からテレビやネットでしか見ることのできなかった福島県に実際に足を運べ、私自身全く知らなかったことをたくさん知られてとても良い経験だったなと強く感じる。この福島スタディツアーを終えて、私も福島県の復興の力になりたいと強く感じるようになった。

中村　あや（社会学部　２年次生）

東日本大震災から11年が経過した。11年という月日は長く、私たちの暮らす毎日は日々変化しているのに、被災地で見た破壊されたままの建物を見て、あの日から取り残されたままの人たちがいることが分かった。空間放射線量を測る線量計が設置されているということは、まだ被害が残っているということであり、放射能の影響で帰還できる状況が整っていないため帰れない人も多数いるということだ。震災後荒れた土地が今は田んぼや太陽光発電の場所になっていた。昔はあちらこちらに住宅が並んでいたと知って、自分がいままで何気なく暮らしていた生活がどれだけ幸福であったのかということに気づいた。自分とは境遇が異なっていて、改めて災害に対する自分の意識はこのままでいいのかと考えるようになった。

南海トラフ地震も近年訪れるのではないかと懸念が高まる中、いつ自分の身に降りかかるかも分からない。報道されていることが現場の全てでないことと災害を他人事と油断していたこと、今回自分の無知に気づかされた。この経験を無駄にせず、今何が起こっているのか興味を広げていきたい。

成川　雅妃（社会学部　２年次生）

今回の福島スタディツアーに参加して、三つ印象に残った事がある。

一つ目は震災遺構として残っている浪江町立請戸小学校を見学したことである。校舎二階まで浸水したその当時のままの状態で残っているのを目の当たりにして、改めて津波の恐ろしさや避難経路の直前の変更等、震災が起こった際にマニュアルに沿った行動だけが正しいのではなく、その時の状況に沿って避難経路の変更など、最善の行動をとることの難しさを痛感した。

二つ目にデイさぽーとぴーなっつの青田さんの話から、「てんでんこ」という言葉が強く印象に残っており、周囲のコミュニティが希薄であると懸念されている時世の中で、震災が起こった際に自分の命を守ることが優先されるが、その中でいかにして自身の周辺の人も助けるかという共助が大切であると考えた。今後、また大きな震災が起こった際にこの考え方は重要で伝え続けていくべきであると感じ、これからどのように人と関わっていくかが大切だと感じた。

三つ目は阿部農園の話を聞いた上での放射能に対する風評被害である。風評被害は農園だけでなく、観光等福島県全体に向けられていて、現地の人の話を聞く中で、払拭するために様々な取り組みを行っていることを知った。

全体を通して、見えているものだけが全てではないと感じた。多くの人が様々な思いを抱えて10年以上経過した現在も生活している事を知った。現地に行かなければ知りえないことが多くあったので、現地の人の思いや現状を伝え続けていくべきである。

田村　勝哉（政策学部　２年次生）

今回のツアーで私は、福島には地震、津波の被害だけでなく「原発事故」という他県にはない大きな爪痕が残されたということ、そしてそれが今もなお福島に暗い影を落としているということを最も強く感じた。震災後、元々自宅があった土地が災害危険区域に指定され、震災前の生活が取り戻せない人々や、帰還困難区域の指定を受けたために、11年が経過した今もなお避難生活を強いられている人々がいること。また、賠償金を巡り住民内で分断が生じていたといった現実を知り、私は原発事故が福島にもたらした影響は計り知れないほどのものであったことを実感した。

大手企業との連携による地域振興である「道の駅なみえ」や、地域資源を活用した持続可能なまちづくりを行う土湯温泉の事例は、震災後の復興に向けた新たな取り組みとして学ぶべき点が多くあった。

私はこれまで被災地の復興は順調に進んでいると思っていたが、地区といった小さな単位で見るとまだ順調とはいえない地域もあることに気づいた。そして、本当の意味での「復興」とは何か、またそれが成し遂げられるためには何が必要で、自分には何ができるのかという問いが新たに生まれた。この問いを明らかにするためにも、私はこれからも東北・福島について学び続けていきたいと思う。

4. コーディネーター所感

コロナ禍の影響で、２年間、実際に訪問することが出来なくなり、やっと再開が決定しても出発間際に、次年度に延期が決定するなど、宿泊を伴う活動の再開は非常に困難でした。そんな状況下でしたが、改めて「百聞は一見に如かず」なのだと実感しました。

実際に行ってみなければ、参加学生達はここまで心が揺さぶられることはなかったと思います。ふりかえりの度に、悩みながらも学生達の言葉が深まるのを感じていました。参加学生は学部も違えば学年

も違い、当然のことながら一人ひとり興味範囲も知識量も違います。同じ体験をしても一人ひとりが異なった視点でじっくり語り合う時間はとても貴重でした。

宿泊を伴うプログラムはリスクもありますが、学びの深さは圧倒的で、学生にとって必要な事だと痛感しました。

充実したプログラムになったと思っていますが、残念だったことが２点あります。

１点目は、事前学習にも参加していた学生２名がツアー直前に参加出来なくなってしまったことです。２名ともとても意欲の高い学生だったので本当に残念でなりませんでした。

２点目は、地元の人たち（今までは高齢者サロンなどを訪問し、一緒にお茶を飲んだりしながら交流をしていました）との交流が出来なかったことです。またいつか、こういった出会いの場をつくることが出来ればと思います。

このような厳しい状況下で快く本プログラムに協力していただいた皆様には感謝しかありません。本当にありがとうございました。

〈報告者：竹田 純子
（深草キャンパス コーディネーター）〉

事　業　名	夏季海外体験学習プログラム コーヒーを通して多角的に国際問題に迫る！ SDGs を体感するコーヒー農場・JICA 関西見学ツアー
実施日程	2022年９月18日（日）9時00分～12時40分 2022年９月19日（月）12時45分～16時30分
実施場所	１日目：㈱環境総合管理機構　守山農場 ２日目：JICA 関西（台風接近のためオンライン開催に変更）
参加人数	18名
参加学生	徐　　嬌（国際4）　辻元一貴（国際4）　張　瀚軒（経済3）　大原健太郎（経営3） 青野梨々香（国際3）　岳　明華（国際3）　黒澤生吹（農学3）　井上美咲（農学3） 堀井涼花（農学3）　五井真子（経済2）　池本結希菜（社会2） 成川雅妃（社会2）　松村春華（社会2）　関　鉄仁（農学2）　東郷真穂（農学2） 三枝亜伽莉（農学2）　鷦鷯友莉（国際1）　松浪愛音（国際1）
協力者・団体	株式会社環境総合管理機構 守山農場 独立行政法人国際協力機構（JICA 関西・JICA 滋賀デスク） 特定非営利活動法人コーヒー生産地と協働する会

1. 目的

ボランティア・NPO 活動センター（以下、センター）が実施する海外体験学習プログラムは、治安や衛生環境などが安全と判断される海外において、学生がその地域の抱える社会的課題に触れるとともに、福祉分野、環境分野等の現地 NPO・NGO との交流を通して、ボランティア等の体験学習を行うことにより、異文化間における相互理解と共生を学ぶことを目的としています。

コロナ禍以前は実際に海外に訪れるスタディツアーを実施していましたが、2020年度以降はオンライン等を利用し、国内で国際問題に迫るプログラムを実施しています。

今回は身近なものである『コーヒー』をテーマに多角的に国際問題について広く学ぶ事が出来るプログラムを企画しました。実際に滋賀県にあるコーヒー農場や神戸市にある JICA 関西を訪れる事で、肌で感じてもらう事を意識し、特定の国や社会課題にとらわれず、広い視野を持って色々な課題に気付く事を目的に実施しました。

2. プログラム内容

（1）１日目　㈱環境総合管理機構　守山農場訪問
講師：㈱環境総合管理機構
支配人　前田興治さん
・守山農場概要説明
・コーヒー農園見学（コーヒーの木の他、パパイヤなど熱帯植物の栽培状況の見学）
・腐葉土作り体験

・コーヒーの葉のお茶試飲体験
・コーヒー栽培や有機栽培についての講義
・質疑応答
・JICA 導入講座

前田さんの案内の下、農園の見学を行いました。また、JICA 滋賀デスクの桂氏が見学に来ていただいたので、急遽翌日の導入になるお話をしてもらいました。

（2）2 日目　JICA 関西訪問

※当初は JICA 関西訪問予定であったが、台風接近のため急遽オンラインでの開催に変更。

講師：特定非営利活動法人コーヒー生産地と協働する会 代表　古賀聖啓さん
JICA 関西　津田かおりさん
JICA 滋賀デスク　桂邦武さん

・JICA 概要説明（津田さん）
・JICA 海外協力隊について（桂さん）
・協力隊体験談（桂さん）
・ルワンダコーヒー栽培について（古賀さん）
・グループディスカッション
・感想共有
・質疑応答

前半部分では JICA の皆様より JICA の活動や国際協力についてお話を聞き、後半部分でルワンダコーヒー栽培に関する現地が抱える問題についてお話いただきました。また団体の支援や現地の文化についても映像やクイズを交えながらお話くださいました。

（3）事後振り返り

2022年 9 月29日（木）18時00分～19時00分

オンラインで当日の内容について振り返り、意見共有等を実施しました。レポート作成を通して今回学んだ事等の整理を進めました。

3. 参加学生からの報告

徐　　嬌（国際学部　4 年次生）

私はコーヒーに興味があるので、今回の海外体験学習プログラムに参加し、守山農場の見学に行きました。農場では、コーヒー栽培についての知識をいろいろ教えてもらいました。日本の本州でコーヒーを栽培する事が可能ではある一方で、いろんな困難もあるということを知りました。気候や害虫などいろんな問題があります。でも、守山農場は独特な所もあります。IT の力を借りるスマート農業や、昔ながらのやり方を大事にしている無農薬栽培などの話も聞きました。伝統的なものを捨てないで、新たな技術を導入することは今の時代で有難いことだと思います。

また、コーヒーの葉っぱから出したお茶を初めて飲みました。商品化を実現するために、まだ長い道があったとしても、とりあえずやります。可能性が低くてもいったんチャレンジするという、守山農場の方の農業に対する熱意を感じました。未来に向けて可能性がある事に努力している皆さんの姿が、私の力になりました。

辻元　一貴（国際学部　4 年次生）

全体を通してアフリカについて知ることができたのがよかった。たとえば、アフリカでは富を分け合う文化があるということで、大きな入れ物に入った酒を全員で飲むことが友好の印になっているなどがとても面白かった。また、エチオピアでは私が知っているコーヒーの淹れ方よりも凝っていることも興味深かった。

海外協力隊のお話では、小学校を卒業するのが難しいというエチオピアの教育状況に対し、科学に興味を持ってもらうように働きかけたということを聞いた。これは実験や科学の楽しさを伝えるだけでなく、身近なもので工夫する力にもなるのでエチオピアの教育分野に貢献できていてすごいと感じた。

ルワンダでのお話からはコーヒー生産の苦労を知ることができた。コーヒー生産の現状を知ることができればフェアトレード商品を購入することにためらいがなくなると思った。逆にみんなが楽しそうに加工場で作業していたのも、フェアトレードを推奨できるバックグランドストーリーだと思う。

張　　瀚軒（経済学部　３年次生）

守山農場ではコーヒーノキなど無農薬栽培を温室内で行っています。コーヒーは、温度・降水量・土質・日照量が適していないと育ちません。農場主の前田さんによると、守山市はある程度の日照時間を確保できるものの、冬は雪が降ることもあり、栽培適地とはいえないとのことです。また、有機栽培のことも紹介してもらいました。「化学的に合成された肥料および農薬を使わない」という有機農業は魅力的ですが、生産量と値段面というデメリット面もあります。なぜそのような難しい栽培にチャレンジされているのか、有機農業は化学的に合成された肥料や農薬を使わず、環境負荷をできるだけ減らして生産する点で、自然にやさしい農業だと前田さんは言いました。

翌日には、オンラインでJICAの取り組みを聞きました。JICA海外協力隊は、自分の持っている技術・経験を生かし、開発途上国の人々のために活動をしています。特に、ルワンダコーヒーのことが印象的でした。

大原　健太郎（経営学部　３年次生）

私は今回海外体験学習プログラムに参加し、滋賀県にある「守山農場」のコーヒー農園を見学した。そもそもコーヒー豆の栽培は、赤道をはさんだ北緯25度のエリアに広がる「コーヒーベルト」と呼ばれる地域で生産・輸出されていることが一般的である。今回訪問した守山農場は滋賀県守山市で日本のほぼど真ん中に位置し、一般的にはコーヒー栽培に適していない土地で栽培を行っていることに非常に驚いたのである。農園内ではマンゴーやパパイヤ、ニームなどコーヒー以外の植物も無農薬で栽培されている。違う種類の作物を育てる事で連作障害を防ぐ役割を持っているのである。

コーヒー栽培は温室栽培で行うので、それに伴う影響をかなり受けたそうである。気温や害虫の被害を昔ながらの知恵と経験、自然をいかし、AIの技術を取り入れて解決しながら無農薬栽培を続けておられることが分かった。そして自分自身が普段行っている農業ボランティアとの比較や前田さんのお話を聴けて、とても有意義な体験になった。

青野　梨々香（国際学部　３年次生）

１日目の守山農場は、コーヒーをメインに扱っている農園で、その他にもマンゴーやパパイヤを育てていた。この農園では、主にハウス内の見学と、力を入れているというコーヒーの有機農法についてのお話を聞くことができた。実際に卵の殻を混ぜた肥料なども見せていただいた。

２日目のJICAのプログラムでは３名の方のお話を聞くことができた。ルワンダに行った古賀さんは、ルワンダで小規模コーヒー農家とコーヒー加工会社の支援に行ったそうで、ルワンダ現地で撮った映像を見せていただいたり、ルワンダのコーヒー栽培の実態などをお聞きしたりすることができた。

本プログラムを通して、コーヒーに対する知識を得たり、JICA協力隊の方々の体験談で海外支援について知ることができ、非常に有意義なプログラムとなった。

岳　　明華（国際学部　３年次生）

９月18日に守山農場を見学しました。事前学習では、守山農場が特集された新聞記事を読んで、コーヒー豆を栽培することを目指しているということを知りました。

見学すると、マンゴーやパパイヤなど、南国でよく栽培されている印象のある植物が植えられていて、実際に所々に小さな実がなっているのも見つけることができました。それらの植物はビニールハウスの中で育てられており、大きな機械によって温度調整もされていたので、南国のような環境をうまく造って植物を栽培していることがわかりました。このことから、コーヒー豆の栽培も決して不可能ではないと感じたし、日本で育てるために、ほかにどのような工夫がされているのかにも興味を持ちました。

農場見学の後に、農家の方のお話を聞く機会があったのですが、そこでコーヒー豆の栽培は守山農場だけでなく、日本各地で行われていて、実際に成功した農場もいくつかあるということを知りました。北海道でも栽培されていたようで、その土地本来の気候にかかわらず、工夫を凝らして栽培している農場があることを教えていただきました。

黒澤　生吹（農学部　３年次生）

私は大学で土壌学を専攻しており、特に熱帯での作物栽培や熱帯土壌にとても興味がある。今回のプログラムで、本来は日本での栽培が難しいとされているコーヒーやパパイヤなどの熱帯植物を栽培されている守山農場を見学したことは、とても良い勉強になった。

その中でも、私はそこで行われている有機栽培に特に興味を持った。有機栽培は環境に影響を及ぼす化学物質を使わず、環境に優しい物質、防除植物などを用いる農法である。守山農場では身近にあるものを組み合わせて有機農業が行われていて、農薬を使わずとも工夫をすればさまざまなものが代わりになりえると知ることができた。

また、私は将来、農業で海外協力隊に参加したいと考えているため、二日目のJICA海外協力隊の話を聞けたことはとても勉強になった。私がずっと気になっていた現地の人とのコミュニケーションの重要性についてお話しいただき、海外協力隊になるためにこれからどんな勉強をしていくか迷っていた私にとって、とても良い機会となった。

井上　美咲（農学部　３年次生）

コーヒーの木には、三大害虫「カイガラムシ」「アブラムシ」「ハマキガシ」という天敵が存在するとのことでした。実際に数匹発見しましたが、非常に小さく、しっかり探さなければいけません。もし発見したら、その周囲にもいるものと思え！ということで、目印がつけられていました。また、虫の処理は溺死とのことで、有機農業をおこなっている農園として、間接的にも化学性物質を使わないようにしておられました。さらに、周辺に砂糖を撒くことによって蟻避けができるかもしれない、ということもおっしゃっていました。

そして、今回このプログラムに参加した一番の理由であるコーヒーでできたお茶をいただきました。非常に香ばしく、冷やしても温めてもおいしくなりそうで、つい何杯も飲んでしまいました。このお茶には、トリゴネニンと呼ばれる成分が含まれており、認知症予防に効果があるそうです。「コーヒーの葉で作ったお茶」というフレーズが非常に興味をそそりました。ぜひ一般販売されてほしいです。

その他にも、コーヒーの木を用いたノベルティがありました。すべて手作りでここにしか売っておらず、つい、コーヒーの木と豆が用いられたピアスを購入してしまいました。

堀井　涼花（農学部　３年次生）

守山農場では、ハウスの見学をしたり、有機農業についてのお話を聞いたりした。ハウス内にはカメラやセンサーがあり、事務所で気温や葉の状態を見ることができる。また、使わない木の枝で小物を作って販売したり、土に卵の殻を混ぜたりしていて、捨てる物ができるだけないようにする取り組みが素敵だと思った。

JICAに関するお話では海外協力隊での経験談が中心だった。古賀さんはルワンダでのコーヒー農家の支援活動などについて話してくださった。協力隊として教えることより、農家に教えてもらうことの方が多かったと言っておられた。

このプログラムを通して、国内で難しいコーヒー栽培に取り組む守山農場の方の姿勢や、言葉や文化の壁を乗り越え国を超えて社会に貢献する方々の情熱に刺激を受けた。自分も人の力になり、それを喜びとする人になりたいと思った。

五井　真子（経済学部　２年次生）

９月18日に、守山農場に行きました。当日は京都駅から出発した後、滋賀県に入るとあいにくの雨でどうなるか不安でしたが、守山農場では主にビニールハウスで作物を栽培されていたので、雨でもじっくり作物を観察することができました。コーヒーの木は間隔をあけて植えてあって、最初はもう少し狭めたほうが効率は上がるのではないかと考えていましたが、間隔をあけないと大きく育たないということがわかりました。コーヒーの木を実際に見るのは初めてだったので、毎日飲んでいるコーヒーがどのように育てられているのか知ることができてよかったです。ビニールハウスを出た後はコーヒーの葉から作ったお茶をいただきました。汗をかいたのも相まってとてもおいしかったです。商品が出た

ら絶対に購入したいと思いました。

池本　結希菜（社会学部　２年次生）

コーヒーに焦点をあて、国際協力やSDGsについて考え身近に感じることができたプログラムだった。

一日目はコーヒー農園守山農場を訪問した。この農場では無農薬で栽培をされている。天然資源の節約、地域の資材を使い無駄が少ないなどのメリットがありSDGsにも関連する。一方トレサビリティの限界がある。本当に無農薬を実現しようと思えば、有機農法を広める必要がある。消費者はそのメリット・デメリットを知って商品を買うことでSDGsについて考えて関わることができ、私たちでも有機農業の支援ができる。

二日目はJICA関西を通じてコーヒー農地の支援をしている方から国際協力の話を聞いた。ただこちらが技術を教えて現地の人が教わるのではなく、交流をしていく中で情報をもらい相談にのってもらうなど、現地の人から教わることも多い。国際協力には「信頼」が土台にある。共に生活をし、相互理解をすることで信頼関係を築くことができる。

自分たちの少しの行動や知識があれば、力になれることを他の学生にも知ってほしい。

成川　雅妃（社会学部　２年次生）

この海外体験学習プログラムに参加して、海外分野に対して視野を広げることで様々な見方ができることを知った。

一日目の守山農場では、海外で栽培される熱帯植物を日本で生産していることを初めて知った。農場のある守山市は他地域と比べて比較的日照時間は長いが、冬には雪が降ることもあり栽培適地とは言えない環境で、IT技術を用いながら試行錯誤を重ねていた。日本でコーヒー栽培をこのように実践している農場があることを知り、海外で栽培される他の植物も日本で生産する取り組みがされているのではないかといった新たな疑問と発見があった。

二日目のJICA海外協力隊では、古賀さんと桂さんからルワンダとエチオピアの衣食住について話を聞いた。ルワンダの約70％が農業に従事している中で40万世帯がコーヒーを栽培している。ルワンダにとってコーヒーの栽培は生活に関わることであるが、実際は貧困の影響によって教育を十分に受けることができていない子どもが多くいる。その問題に対し、フェアトレード商品を購入することで間接的に解決へ取り組むことができる事を知ってもらいたいと強く感じた。

以上のように、今回のプログラムを通して海外分野に視野を広げる大切さを学んだ。

松村　春華（社会学部　２年次生）

私は今回の海外体験学習プログラムを通し、自分自身の視野が広がったと思っています。

まず１日目の守山農場では、様々な工夫と試行錯誤を繰り返しながら、有機農法でのコーヒー豆の栽培をされている風景を見学させていただきました。デメリットも多い有機農法ですが、それでも、今後に希望を持ちながら有機農法に取り組まれている守山農場の方達のまっすぐな思いを感じました。

２日目のJICAのお話では、被支援国に対して一方的・一時的な支援をするのではなく、大切なのは現地の方々と共に問題解決のために動くこと、そして今後の現地での生活のことも考えながら支えることであり、それが信頼関係を築いて協力するためにも必要であるということを知りました。

この２日間で初めて知ったことや、ハッとさせられたことなどが多くありました。これまではあまり海外に目を向けていなかったのですが、今回をきっかけに、色々な国の文化や暮らしについても興味が湧き、もっと学びたいと思った２日間でした。

関　　鉄仁（農学部　２年次生）

守山農場の見学についてまとめると、熱帯地域の植物を育てるにあたってやはり温度調節や植える場所など課題がすごく多いなと感じた。さらに無農薬でやることによって害虫対策もしっかりしなければならない。しかしメリットもあって卵の殻や稲わらを使うことによって環境の負荷を減らす手助けができるし、工夫や努力しているところに尊敬した。

JICAの方からは海外協力隊での活動の話を聞いた。海外でもいろいろな課題や問題があった。それ

をその国の住民と協力しながら解決するために派遣され、日本の技術などを教えたり、一緒に考えたりする。それによって少しでも改善に繋がればという思いがあるのだと感じた。さらに農業関係の問題では地域の人々に寄り添って教えていくことで、その地域の良いところも生かしつつ、改善していくというのが理想なのだと話を聞いていて感じた。

東郷　真穂（農学部　２年次生）

海外体験学習プログラムに参加しようと思ったきっかけは、龍谷祭の模擬店の企画メンバーになったためでした。当初、コーヒー栽培やJICAについて深い知識があったわけでもなく、コーヒーを育てている、発展途上国のために支援している、としか思っていませんでした。しかし、実際に守山農場に行ったりJICAの方々の話を聞いたりしていると、現地でしか感じられないことがあり、その場所でしか得られないもの、教えられるものがあると知りました。そして、現地の支援だけではなく、人員確保やその人材のパワーアップのための時間が不足しているため、そういった人材に対する支援も必要だと分かりました。

今回感じたのは、行動しなければ自分自身も相手も決して変化することはなく、行動すると結果的にその人も相手にとってもお互い満足感や嬉しさを感じることになるということです。今までなかった経験や行動をすることで、他では得難いものを獲得することができ、考え方の選択肢が増えていくのではないかと思っています。

三枝　亜伽莉（農学部　２年次生）

一日目の守山農場では、オーナーである前田さんのお話を聞きながら農場を回りました。守山農場ではコーヒーの木を育てる上で様々な創意工夫がされており、例えば、三大害虫の対策のため、扇風機をたくさん回して風通しを良くしたり、卵の殻を肥料につかったりして有機農法に取り組んでいました。

二日目はオンラインでJICA職員や元海外協力隊の方からお話を聞きました。JICAでは国際協力をするうえで信頼とつながりを一番大切にしていると言われました。また、派遣先の学校の状況や困っていることについても学ぶなど、オンラインでしたが途上国についてよく理解することができました。

私はこの二日間で自分が恵まれていることや、当たり前のことを当たり前にできる環境に感謝して生きていく大事さを感じることができました。

鷦鷯　友莉（国際学部　１年次生）

夏季海外体験学習に参加した２日間、自分が知らなかったことにたくさん出会えた。

守山農場では、卵の殻とかを肥料とした無駄のない有機農法のことを知り、凄いなと思った。また、小さな穴をいくつもあけた植木鉢の中で育てた植物を、鉢ごと地面に埋めるといった工夫をされていた。そうすることで植物を移動させる時に運びやすくする他、穴をあけることで水はけを良くし、植物を枯らしてしまう大きな原因である水のやりすぎを防止できる。

２日目の協力隊経験者の方々のお話から、途上国の教育問題は子供だけでなく教師にも目を向ける必要があると分かった。また、コーヒー生産においてはルワンダの方々と日本の合理性が違うため、土地改良に参加していただくことも簡単でないと知り、難しいと感じた。

私は今までもっとお金を支援し、道やルールを整備するともっと早く発展し、豊かになると思っていた。しかし今回のプログラムを通して、そのようなことを行っても現地の人が守られるとは限らず、「自分たちで考えて取り組み、成長した」という実感が得られにくいため必ずしも喜ばれないと知り、塩梅が難しいなと感じた。

松浪　愛音（国際学部　１年次生）

一日目の守山農場見学で感じたことが二つある。一つ目は、コーヒーだけではなく、私たちは生産者がいるから食べ、生きることができるという当たり前の事実だ。コーヒーの実一つの中に一つの豆が入っている。収穫はすべて手作業。この手作業やその後の様々な工程を経て、私たちの飲むコーヒーになると考えると、すべての食材・それに関わったすべての人に感謝しようと考えた。

二つ目は、今日インターネットやAIが発達しているが、農業において最終判断は人の手だということだ。機械が観測したデータを見てどうするかの判断、ボイラーの周辺は機械の熱で作物が影響を受けることへの対処、ある一定の範囲だけうまく作物が育たない理由を探るなど、人の手や人の考えが不可欠であることが分かった。農業は完全にAI化できないのではないか、この手作業による技術を未来につないでいく必要があると考えた。

4. コーディネーター所感

過去２年間、オンラインの利用や学内に講師をお招きする事で実施してきた海外体験でしたが、今回ようやく自宅・大学を飛び出して活動する事ができました。２日目のプログラムに関しては、台風の接近に伴い、急遽前日にオンラインでの開催に変更となりました。コロナ以外の要因でオンラインに変更になるとは思ってもいなかったのですが、過去２年間の蓄積のおかげもあり、つつがなく運営する事ができました。

守山農場でのプログラムでは初めて見るコーヒーの木や実を見学したり、腐葉土作り体験など普通の学生生活では出会う事のない体験が出来たのではないかと思います。現場で見学して、団体の方とも実際に会って話を聞く。そんな当たり前の事がいかに有用で大切な事かを改めて実感しました。

JICA プログラムもオンライン開催にはなりましたが、画面を通して講師の皆様の熱い想いが届く内容となりました。海外に出た経験の少ない学生にとっては好奇心をくすぐられる内容だったかと思います。

もう間もなく自由に海外渡航できる時期が来ると思います。その時にどんな問題意識を持ってフィールドに出ていくのか、どんな課題が世界にはあるのか、その中で自分自身が解決したい問題は何なのか。自分自身の中で見つけるきっかけ作りになっていれば幸いです。

今回は台風接近の影響もあり、受入先の皆様にも多大なるご協力をいただきました。ギリギリまで開催が危ぶまれる中、無事に実施出来たのは協力いただいた全ての皆様のおかげです。お力添えいただき、本当にありがとうございました。

〈報告者：吉田 裕貴
（深草キャンパス コーディネーター）〉

事　業　名	夏季体験学習プログラム報告会　～知ることから始めるスタディツアー～
実施日程	①国内体験学習プログラム：2022年10月19日（水）17時45分～19時15分 ②海外体験学習プログラム：2022年10月27日（木）12時45分～13時15分
実施場所	①深草キャンパス21号館401教室＆オンライン ②オンライン
参加人数	①30名（対面・オンライン合計） ②38名

1. 経緯・目的

参加した学生がどのような事を学び、考え、今後の活動にどう活かしていこうとしているのかを発表する機会を作り、参加した学生自身の整理や、プログラムに参加していない学生に学びを共有する事を目的に報告会を行いました。

より多くの学生が参加出来るようにするため、全ての報告会でオンラインを併用し、対面で実施の際は深草・瀬田両キャンパスで実施しました。

2. 概要

下記２つのプログラムに参加した学生が、それぞれの体験を通じ、学び・考えた事について報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、今回のスタディツアーに協力いただいた団体の方々にもご参加いただきました。

また、両プログラムに参加した学生の事後レポートを１冊のレポート集にまとめて配布しました。

■報告プログラム

①国内体験学習プログラム

『福島スタディツアー～福島の「今」を見、福島をいきる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～』

※2021年度春季実施予定のプログラムは、コロナ禍の影響により2022年度夏に順延して実施

②夏季海外体験学習プログラム

『コーヒーを通して多角的に国際問題に迫る！
SDGs を体感するコーヒー農場・JICA 関西見学ツアー』

3. コーディネーター所感

国内体験学習プログラムは2021年度春に実施予定でしたが、2022年度夏へ延期となりました。参加した学生にとって待ちに待った参加だったと思います。それが伝わる内容でした。報告会の資料作成もギリギリまで調整し、心配していましたが、悩んで葛藤して作るからこそ伝わるものがあるのだなと改めて思いました。当日は、学生が報告した後、福島からオンラインでコメントをいただくことが出来たので、更に伝えたかった想いに厚みが出たように感じています。

海外体験学習プログラムでは今回は参加した学生が多く、全体で密なコミュニケーションを取る事が難しかったため、報告会の準備が特定の参加した学生に偏るなど課題を感じました。当日は学生自身の言葉で学んできた事を発表してくれたのでとてもよかったと思います。

どちらのプログラムも今回はオンラインを使用したため、会場には来る事が出来ない協力団体の方々にもご参加いただく事が出来ました。学生たちが学んだ事、感じた事を直接聴いていただき、コメントをしていただき、とても有意義な内容になりました。報告会の開催方法や内容など、試行錯誤を続けながらよりよい形を探っていければと思います。

〈報告者：吉田 裕貴
（深草キャンパス コーディネーター）〉

事　業　名	春季海外体験学習プログラム 『アフガニスタンの今と未来。～日本にいる私たちに出来る事は？～』
実施日程	①2023年１月20日（金）17時00分～19時00分　第一部講演会 ②2023年１月30日（月）11時00分～12時00分　参加者交流会 ③2023年２月19日（日）10時30分～16時00分　第二部フィールドワーク ④2023年２月21日（火）13時00分～15時00分　事後振り返り会
実施場所	①深草キャンパス22号館303教室＆オンライン ②オンライン ③ TIFA カフェ・サパナ（大阪府豊中市） ④深草キャンパス和顔館315教室
参加人数	学生12名　※第一部のみ全学に公開して実施。教職員含め計40名程度の参加
参加学生	沼　直樹（文学3）　蓮井碧生（文学3）　安藤愛美（経営3）　五十嵐南美（経営3） 小倉未耶（経営2）　川口克基（社会2）　中村あや（社会2）　奥田真史（政策2） 蔵本千優（社会1）　佐田穂花（社会1）　寺島涼葉（社会1）　藤田美結（社会1）

1. 経緯・目的

2021年度にも実施したアフガニスタンに関するプログラム内容を再構成して実施しました。アフガニスタンで政変が起こり、１年以上が経過しました。政変直後はメディアに取り上げられる事が多くありましたが、最近ではほとんど報じられなくなりました。

ただ、報じられる事がなくなっただけで問題が解決した訳ではありません。今回は政変前からアフガニスタンを支援している NGO（2団体）に協力いただき、現在のアフガニスタンの状況や問題、希望について、青少年の視点、女性の視点で学び、広い視野を持って国際問題について考えられるようになる事を目的にプログラムを実施しました。

2. 概要

①第一部：講演会

『報道されないアフガニスタンの今と NGO の支援』

協力団体：（一社）平和村ユナイテッド

第一部では平和村ユナイテッドの小野山さんをお招きし、講演会を実施しました。講演ではアフガニスタンを中心に一部隣国パキスタンの状況もふまえながら、青少年の活動状況やその活動を支える団体の活動についてお話しいただきました。

②参加者交流会

第二部でのフィールドワークを円滑にかつ効果的に実施するため、オンラインで参加者交流会を実施しました。単なる交流会に終わらないように、第一部の感想共有や第二部に向けてグループ分けをして各グループでの事前学習に繋げました。

③第二部：フィールドワーク

『草の根の活動から支援を考える。やりがい作りと生活支援』（協力団体：EJAAD JAPAN）

豊中市にある TIFA カフェ・サパナを訪れ、同カフェを拠点に活動している EJAAD JAPAN の皆さんにアフガニスタン女性の支援活動についてお話を聞きました。カブールとオンラインで繋ぎ、伝統的な刺繍の制作者である女性からお話をお聞きしたり、実際に作成された刺繍作品を手に取り、仕分け作業のお手伝いを行いました。昼食は在住アフガン人の方に現地の家庭料理を振舞っていただきました。今回は日本で支援されている方、現地での生産者、在住アフガン人の方や色々な立場の方とコミュニケーションを取り、アフガニスタンの今について学びました。

④事後振り返り会

第一部・第二部で学んだ事をより深め、自分達に出来る事は何かを考える事を目的に実施しました。参加者全員で感想などを共有し、色々な視点で今回の活動について振り返る事が出来ました。振り返り会では実際に刺繍作品を多くの人に見てもらいたいとの意見が出て、刺繍作品の展示会をすることになりました。

3. 参加学生からの報告

沼　直樹（文学部　3年次生）

2001年から2021年の間での米軍を中心とした連合軍とタリバンとの紛争以降、アフガニスタンでは暴力や復讐の連鎖は続いている。そのため、その連鎖を断ち切るために力には頼らない解決方法、平和・非暴力主義の活動が求められている。

アフガニスタンでは、タリバンの支配以降、女性の刺繍活動による収入の確保が重要とされている。それは、家族の生活を支えるためであり、また刺繍による収入で経済力をつけ、女性が教育や結婚について自分自身で決定できるようになるためである。そのため現在では、今までに自分では収入を得たことのない女性たちがカブールの刺繍教室を行うといった活動が行われている。

こうした背景がある中で、アフガニスタンの女性たちの活動を応援しているEJAADでは、パシュトゥン族の女性たちの家計を支えているほか、作業や学習のための環境整備に役立てられるように、女性たちの手仕事作品の紹介販売による売上をすべて現地に送金する活動が行われている。

蓮井　碧生（文学部　3年次生）

アフガニスタンは現在も紛争が続いており、平和村ユナイテッドやEJAADなどのNGOがアフガニスタンの現状を変えるために活動していることを知った。アフガニスタンには「力の信奉」があり、暴力の連鎖があることを知ったが、平和村ユナイテッドのメンバーのように人は変わることができると感じた。平和村ユナイテッドは現地の大人や学生を対象に「平和についての話し合い」を行なっており、女性たちも参加している。

また、EJAADではアフガニスタン女性たちへ支援をしており、彼女たちが伝統文化の刺繍作品を作り、経済的に自立していくことができるように支援している。このように女性が社会に参加することで、アフガニスタンの社会に大きな変化がもたらされる可能性があると感じた。しかし、平和についての話し合いの機会や女性たちへの仕事を普及させるには、私たちも積極的な支援が必要であると考える。

安藤　愛美（経営学部　3年次生）

今回のプログラムを通して感じたことは「希望」です。プログラム参加以前は、メディアやネットで目にするような悲惨な状況しか知りませんでした。その情報がウソだったということではありません。実際に見聞きする以上の悲惨な現状がありました。

例えば「力」の信奉や女性たちの自己決定権が著しく低いという背景から、ただ武器を取り上げる程度のことでは争いは止まないということ、女性がどこかに集まるだけでも難しい現状があることを学びました。

しかし、それでも希望があると思ったのは、現地の人々が希望をもって活動されていると感じたからです。紹介された活動では、現地の人、特に若者が主体となって活動されている印象がありました。

そのように平和や自立を求める若者の存在や実際に実現に向けて挑む姿から、メディアで切り取られる悲劇的な部分だけではない明るさと希望を感じました。

プログラムを通して、私たち日本の学生にできることは、彼らの自主的な活動を周知・支援し、“共に”世界を良くしていくことだと思いました。

五十嵐　南美（経営学部　3年次生）

今回のアフガニスタンのプログラムを通して、私たちが当たり前だと思っていることが実はそうではないということを改めて知ることができた。

例えば、日本では現在戦争は行われておらず、衣食住も十分に与えられ普通に生活をすることができているが、アフガニスタンの子どもたちはそうではない。敵対勢力に親を殺され、鋭い眼差しの復讐に燃えた心を持ち、将来は兵士になるという固い決意を抱いている子どもも多いという話を聞いてとても驚いた。

しかし、そのような状況の中でも、もともと武力に頼っていた方が今は平和活動を行っているという話も聞くことができた。その方の「人は誰でも変わることができる」という言葉がとても印象に残っている。紛争が行われている地でも、何事も武力ではなく対話をすることで物事を解決していくという考

え方は素敵だと思った。

私たちが現在のアフガニスタンのような国の状況を変えるということは規模も大きく難しいように感じるが、まずは現状を知り、小さなことでも良いから自分のできることをしていくことが大切だと感じた。

小倉　未耶（経営学部　2年次生）

第一部では、アフガニスタンの現状を聴いて戦争が憎しみの連鎖を引き起こすことを知った。戦争を経験した子どもに復讐以外の平和な未来のために日常を教える大切さを知れた。アフガニスタンの女性への暴力がしつけや社会的秩序を保つための権利としてみなされ、暴力を振るうことが酷いことだと認識していなかった人がいたことが衝撃的だった。

第二部では、第一部で聴いたアフガニスタンの状況をふまえ、女性が収入を得たり学習したりすることのできるサポートを行っているEJAADの活動を学んだ。団体さんから現地女性が制作している刺繍作品をこれからどう販売するかや、作品の品質など活動上で抱えている問題を教えていただいた。事前に作品の売り方などを班で考えてきたが明確な解決策を見つけることは困難だった。

また第二部での昼食で、アフガニスタン料理を作っていただいた時にピラフにレーズンが入っていたことに気がついた。果物が多く採れるアフガニスタンの料理ではよく使う材料や味付けだそうだ。もっと魅力的な文化が親しみやすくなるような平和な世の中になってほしいと感じた。

川口　克基（社会学部　2年次生）

アフガニスタンの報道はネガティブなものが多い。例えば、紛争やタリバン政権による圧制などである。しかし、今回のプログラムに参加したことによって、そのようなアフガニスタンの現状にも、「希望」があることを学んだ。現地で、現状を変えようとしている人たちがいることである。現地の人々が現状を変えるために自主的に活動しているのである。

また、その活動に遠く離れた日本からでも行動できることを学んだ。募金や、関連商品の購入などによって経済的に支援ができる。また、知ってもらうことでその活動を大きくできるかもしれない。

最後に、現在のアフガニスタンの現状は、男女間の格差の問題は現代の日本でも取り上げられている。アフガニスタンの課題解決の活動が日本でも有効になることもあるだろう。遠い世界の問題を遠いものと考えず、日本に置き換えることで、身近に感じてもらうきっかけになるかもしれない。

中村　あや（社会学部　2年次生）

去年に続き二回目の参加だが、二回目で変わった考えがある。去年も二つの団体からお話をお聞きし、私たちができることを探してみてほしいと伝えられ、多くの人がアフガニスタンの現状に関心を向け、平和活動について知ってもらうべきだと感じた。私の願いは一刻も早く争いを辞めて傷つく人がいなくなることであり、これは去年から変わっていないが、今回はその願う平和について見方が変わった。

日本は戦争のために銃をもたされることはないし、武力で問題を解決しようとすることは悪だと教え込まれている。だからアフガニスタンの方たちに対し、無条件に今すぐ銃を捨てて話し合いの機会を増すこと、これに賛同してくれる現地の方が増えれば良いと前回は思った。

だが今回は、その考えのままでは変えられないと感じた。彼らにとって武器を持つことは自分の国や家族、自身を守るための正義だからだ。守るべきもののために戦うことに誇りをもっているため、私たちが思っている「平和」という価値観を一方的に押し付けることは、相手のプライドをけなしてしまうことになる。彼らにも武器を持つ理由はあるが、他人に怪我を負わせたり自身の大切な命が失われることさえあるため、暴力はあってはならないことだ。現在にも言えることだが価値観にこだわらず、お互いが納得する方法で平和な暮らしができれば良いと思う。

奥田　真史（政策学部　2年次生）

今回のプログラムは第一部、第二部、振り返りで構成されていた。第一部では、自分よりも小さな子どもが常に命の危険がある中で生活をしていると知

り、大きな衝撃を受けた。そのような現状の一方で、子ども達同士が繋がり少しでも平和になるように、厳しい現状の中でも活動されている人が多くいることも知った。

第二部では「TIFA カフェ・サパナ」に訪問し、EJAAD の活動について学んだ。実際に伝統的な刺繍作品にふれてみて、本当に素晴らしい作品だと感じ、このような素晴らしい文化をより多くの人に知ってもらいたいと感じた。また、アフガニスタン人の方が作ってくださったアフガニスタン料理をいただいた。人生で初めてアフガニスタン料理を食べたが、とても美味しく貴重な経験が出来た。厳しい現状ばかり取り上げられがちではあるが、万国共通の食や刺繍作品などのアフガニスタンの魅力を介して繋がることも重要だと感じた。

蔵本　千優（社会学部　１年次生）

第一部にて、アフガニスタンの子ども達がどれほど戦争、暴力の近くで生きることを強いられているのかということを思い知らされた。平和村ユナイテッドの小野山さんはお話の中で、ある映像を見せてくださった。その映像の中では、アフガニスタンの紛争地の子ども達が手を繋いで遊んでいた。しかし、こうした平和に見える映像の中で、女の子の姿がないこと、爆発音が響いていることを見て見ぬふりにしてはいけないと感じた。

第二部では、全て手作業とは思えないほど鮮やかで細かい刺繍が施されたアフガニスタンの女性達が作り上げた刺繍作品を見せていただき、その女性達が上げる声、上げられない声に触れた。アフガニスタンの現地で言語を教える女性が語ってくださった「教師になりたい」という夢と、こうして夢や本音を語れない女性が数多く隠されているという状況について初めて気付かされた。アフガニスタンのことが伝わっていない、伝えられない状況にもどかしさを感じたが、だからこそ私はできることを探さなければならない。

佐田　穂花（社会学部　１年次生）

私がこのプログラムに参加した理由は、アフガニスタンの現状について知りたいと思ったからである。このプログラムに参加する前に調べてみると、アフガニスタンは紛争だけではなく、女性の権利など様々な解決すべき課題をかかえている。

第一部では、映像でアフガニスタンの現状を知ることができた。そこで武力ではなく対話を選び、平和を願っている人が多くいることを知り、対話の重要性を知った。

第二部では、現地の方とオンラインでつなぎ、現地の様子をきくことができた。私が驚いたのは、女性たちが外とのつながりを持ちたいと強く思っていることである。外の世界を知り、アフガニスタンの現状を発信して多くの人に知ってもらうことが大切であると感じた。

このように今回のプログラムにはたくさんの気づきと発見があった。アフガニスタンにも平和を願い、今を変えようと動こうとしている人がいる。その方たちの手助けになりたいと強く感じられるプログラムであった。

寺島　涼葉（社会学部　１年次生）

私は春季海外体験学習プログラムを通じてアフガニスタンの現状を学んだ。私はアフガニスタンに対して「紛争をしている国」や、タリバンが関わっているという抽象的なイメージしか持っていなかった。今回のプログラムでアフガニスタンを一概に見ないでほしいと仰っていて、ハッとさせられた。アフガニスタンに関してだけでなく、イメージで決めつけることは絶対にしてはいけないことだと痛感した。

インパクトの強い内容ばかりが報道され、目立ってしまい、一度ついたイメージは払拭するのが難しいため、メディアは最後まで責任を持つべきだ。ネガティブなニュースはポジティブな事柄と付随させるべきだ。

また私たちの「普通」は世界の「普通」ではないことを学んだ。外出や勉強、食事は私達には当たり前のことだが、当たり前にできない人もかなりの人数いる。ただ当事者はそれに慣れ、当たり前になってしまっている。慣れは怖いし、疑念を持ち続けていくべきだと感じた。

藤田　美結（社会学部　1年次生）

私は春季海外体験学習プログラムに参加し、アフガニスタンの現状や行われている支援について学んだ。

第一部では、平和村ユナイテッドの方の講演で銃を捨て平和活動をしている現地の方のエピソードを聞き、戦争や暴力が当たり前のように蔓延するアフガニスタンの中でそのような活動をしている人がいること、「人は変わることができる」ことを学んだ。

第二部では、EJAAD がアフガニスタンの女性に対して行っている支援について学んだ。EJAAD ではアフガニスタンの女性が制作した刺繍作品の販売を行い、女性が収入を得られるようにしている。フィールドワークでは実際に刺繍作品やアフガニスタン料理に触れアフガニスタンの文化を知ることができた。そこで私はアフガニスタンには前向きに捉えられる文化があると感じた。

今回のプログラムではメディアからは得られないアフガニスタンを知ることができた。今後はアフガニスタンへの支援など自分にできることを見つけていきたい。

5. コーディネーター所感

今回はギリギリまで実際に海外を訪れるスタディツアーが出来ないか検討を進めていました。ただ物価や燃料代の高騰に加え、記録的な円安という状況が重なり、渡航費が想定を大幅に上回る金額となったため、国内で出来るプログラムの実施に切り替えました。残念ながら海外を訪問することは出来ませんでしたが、このような検討を開始出来た事はよかったと思います。

そのような状況下において国内で効果的に国際問題について学べ、国内で実施だからこそ焦点を当てる事が出来るテーマは何かを検討し、今回のプログラムの実施に至りました。

今回のプログラムは、国際問題を学ぶだけではなく、しっかりと感じる事にも重きをおき、文化を体感出来る内容にしました。第一部では、五感に訴えるような講師の熱いお話に加え、現地の映像を見る事で多様な一面を感じる事が出来たと思います。現地の若者の行動にたくさんの勇気をもらいました。第二部では、伝統柄の刺繍を実際に手に取ることが出来たり、アフガニスタン料理を食べたり、文化的な側面もしっかり伝える事を意識しました。両プログラムを通して、メディアで取り上げられるセンセーショナルな側面に限らず、希望に溢れた前向きな側面にも触れ、アフガニスタンの実態を伝える事が出来たと思います。

様々な困難がある中、継続して支援を続けておられる両協力団体に改めて敬意を表するとともに、その活動について丁寧に熱く学生たちに伝えてくださった事に大変感謝しております。ありがとうございました。

〈報告者：吉田 裕貴
（深草キャンパス コーディネーター）〉

事　業　名	福島スタディツアー ～福島の「今」を見、福島を生きる人々の「言葉」を聴き、そして「自分」を見つめる～
実施日程	事前学習会①：2023年２月３日（金） 事前学習会②：2023年２月７日（火） スタディツアー：2023年２月21日（火）～２月25日（土） 事後学習会：2023年３月８日（水）
場　　所	福島県福島市、南相馬市、浪江町、双葉町、富岡町、いわき市　など
参加人数	学生16名、教職員３名　合計19名
参加学生	内田優梨子（経営4）　前田綾子（経済3）　上田七生（社会3）　高山結理（農学3） 美濃部心（文学2）　奥　隆彦（法学2）　松村春華（社会2）　谷村拓郎（政策2） 濱野晃岐（政策2）　髭右近裕彬（政策2）　三枝亜伽莉（農学2） 岩崎　琉（文学1）　木部美沙紀（社会1）　蔵本千優（社会1） 萩原千絵（社会1）　三神有織（社会1）
協力団体	NPO法人うつくしまブランチ／阿部農園／社会福祉法人南相馬市社会福祉協議会／一般社団法人いちばん星南相馬／株式会社小高ワーカーズベース／原子力災害考証館 furusato

1. 目的

ボランティア・NPO活動センターが実施する国内体験学習プログラムは、学生が、該当地域の地域住民やNPO／NGOとの交流を通じて、国内におけるその地域の抱える問題に触れるとともに、ボランティア等の体験学習を行うことにより、より深く社会の問題について考え、その問題解決に向けて自身の問題として考えるきっかけを作ることを目的としています。

「福島スタディツアー」は2015年に開始し、以降、福島県のNPO訪問や地元住民との交流、町のフィールドワーク等を通して、津波・地震・原子力災害という複合災害が引き起こした課題と、そして課題解決に向けて市民がどのような活動を展開してきたのかなどについて、実際に現地を訪問して体感的に学びました。

2. 概要

（1）事前学習会①：2023年２月３日（金）

・東日本大震災～福島の状況について～
筒井のり子ボランティア・NPO活動センター長（社会学部教授）のお話

・参加に関する説明及び参加者自己紹介

（2）事前学習会②：2023年２月７日（火）

※詳細についてはP47参照

（3）スタディツアー：2023年２月21日（火）～２月25日（土）

１日目：２月21日（火）

8時00分に京都駅を出発し、バスの車内で参加者同士の交流を兼ねたワークショップや福島についてのクイズなどを実施。18時30分頃、福島市へ到着しました。

19時30分頃より特定非営利活動法人うつくしまブランチの方々よりお話を伺いました。

２日目：２月22日（水）

午前：福島市内の阿部農園を訪問。梨農園を見学しながら、安全なものを提供するための努力や、農業の楽しさ等についてお話を伺いました。その後、飯舘村を経由して南相馬市へ移動。

午後：社会福祉法人南相馬市社会福祉協議会の方々との交流プログラム。震災当時を含む長きにわたり民生委員をされていた方の体験談を伺ったあと、「高齢者疑似体験」「防災・減災プロジェクト　イザ！カエルキャラバン」という二つの福祉教育を体験させていただきました。

３日目：２月23日（木）

午前：震災遺構　浪江町立請戸小学校および大平山霊園を見学

午後：農家民宿いちばん星併設の「里山キッチン」で昼食及び敷地内の見学をした後、バスで南相馬市内を視察し、震災当時やその後についてのお話を伺いました。

４日目：２月24日（金）

午前：南相馬市小高区を自由散策の後、小高パイオニアヴィレッジにて株式会社小高ワーカーズベースの和田智行さんより、

これまでの取り組みや目指していることについてお話を伺いました。

午後：双葉地域のフィールドワークで、2023年４月に避難指示が解除される予定の富岡町夜ノ森地区を歩いて視察。その後、漁港へ立寄り、そこから見える原発のお話などを伺い、いわき市へ移動。「原子力災害考証館」を見学し、館長の里見さんのお話を伺いました。ふりかえりの後、食事・入浴を済ませて京都に向けて出発しました。

５日目：２月25日（土）

7時00分頃に京都駅を経由し、深草キャンパスに到着・解散しました。

（4）事後学習会：2023年３月8日（水）

スタディツアーから帰ってきて改めて考えたこと、取り組んだこと等について一人ひとり発表して共有した後、報告会で参加者に伝えたいことについて話し合いました。

3. 学生の報告

内田　優梨子（経営学部　４年次生）

テレビで見る被災地と実際に足を運んでみる被災地とは全く違うなと感じた。現地へ行くことで、出てこない感情が溢れ、被災者の実際の思いなどを知れた。

海岸沿い辺りは、いつもの地元の道と比べると、本当に何もない。『ぽつぽつと家は建っている。だけど、ほぼ何もない。ここは海沿い。ということは津波によって…。』そう考えると本当にぞわぞわと鳥肌が立ち、津波の恐ろしさを目で実感した。

また普段から、震災に備えて想定しておくことが重要だと教えて頂いた。特に“てんでんこ”＝ばらばらに逃げることや常に近隣関係を密にし、災害時にひとりぼっちをつくらないこと等。

福島の方の“二度と同じ事を繰り返して欲しくない”という思いを理解し、その思いを受け取るだけでなく、自分達が繋ぐ存在にならないといけない。今回のツアーで学び感じたことは、自分だけの学びにするのではなく、周りに伝える義務があるのだと実感した。

前田　綾子（経済学部　３年次生）

福島スタディツアーは４泊５日の普段は関わることのないメンバーと濃厚な経験ができる貴重な時間でした。個人旅行ではいけない場所や会えない人に出会える体験ができたということも勿論ですが、「原子力発電事故について学びたい」という思いを持った学生が集まるということもかなり刺激的な体験だったと思います。

１日目はホテルが相部屋だったりバスの中で隣の人がいたりと何人もの人と深い話をしあえる機会が多くあると思います。皆それぞれこのスタディツアーの中でも興味をもつ場所が違ったり、自分にはない熱い思いなどを聞けたりするため非常に刺激になります。

同じ大学、しかも年下の人がこんなに自分の信念をもってそれをはっきり言葉にして行動に移していると気づくだけでも価値があることだと思います。少しでも興味があれば、確実に参加するべき体験だと思います。

上田　七生（社会学部　３年次生）

「お前の出身って何があるの？」

そう聞かれると、私は決まって吐き捨てるかのようにこう答えていました。

「何もないよ」

帰還困難区域を歩いて気付いたことがあります。それは私の街には何もかもがあったということです。18年間暮らした実家、思い出の詰まった学校、汗と涙を流したグラウンド、大好きな人達、何でもありました。これがどれほど尊いことか今になって気付きました。その逆を夜ノ森地区で目の当たりにしたからです。町に人はおらず、残されたのは家や庭に置かれた自転車だけ。あるアパートの一室の12年前から干されたままの洗濯物を見て、確かにここに家族の生活があったことがわかります。

いつものことほど人は気づきません。当たり前が続くほど人は油断します。失った後に、いつもどおりを望むのが私たち人間なのかもしれません。この教訓は一生忘れません。そして、当たり前を守り抜

くために備えます。

高山　結理（農学部　３年次生）

耕作放棄地とソーラーパネルが続く一帯が住宅街であったと聞いても、その面影を感じることはできなかった。地図で見るよりもずっと広い範囲に津波が押し寄せてきていたことに強い衝撃を受けた。ただの田んぼやビニールハウスに見えていた農地をひとつみても、海水に侵食された田畑の作付けを再開するには、除塩作業が必要であること。放射能の影響を懸念して、多くの農家が土耕から水耕への切り替えを行なったこと。聞いたことで見方が変わった。津波によって船が半分に減った相馬双葉漁協鹿島支所では、週に２日だけ試験操業が行われている。市場はあるが、放射能測定をする機材が無いために開かれていない。風評被害は落ち着いてきたというが、開始が予定されている処理水の海洋放出によって、新たな風評被害が発生し、漁業は大きな影響を受けるのではないか。いまも目前に問題があることを知った。福島を訪れたことで、たくさんのことを知り、知らなかったことに気付かされた。もっと知りたいと思うことが増えた。

美濃部　心（文学部　２年次生）

正しい情報、そして正しい選択とは何なのか。自分にとって耳あたりの良い情報か。はたまた多くの人が選択したら正しい情報になるのか。その情報は持っているだけでいいのか。

ここ最近、私の近くで死に関する出来事が多く起きた。他人の死から絶対に受け入れたくない死まで。しかしそれらには必ず共通することが１つあった。私は後悔していた。私はその死の事実が訪れた時に必ず後悔をしていた。今更考えても仕方がないことのはずなのに、後からより良い方を願ってしまう。もっと事前にできることはあったはずだ。楽な、聞こえの良い方だけを信じ、事実から目を背けた私がいけなかった。今まさに苦しんでいる子がそこにいるのに私には何もできない。

今私の目の前には１つの死がある。いくつもの選択肢が与えられ、何が正しいのかどれを信じればいいか分からなかった。その子との時間は、信じたくはないが、もう長くないだろう。しかし自分にとって楽な情報だけを聞きそれ以外を受け入れないのではなく、自分にとって、またその子にとって最善の選択だったといえるような行動を取りたい。

奥　隆彦（法学部　２年次生）

今回、スタディツアーで福島に行きましたが、原発事故による影響は計り知れないと思いました。日本が経験したことのない未曽有の大惨事に対して、国や政府の対応は不十分で足りていないと感じました。被災地の方々が求めているものが何であるかを知る必要があると思いました。私は被災地に行ったのは初めてでしたが、震災の遺構を見て、現地の方のお話を聞いて、それまで知らなかったことや新たに気づいたことがたくさんありました。百聞は一見に如かずだと思いました。

電気を使っている人間として、私はこれからも節電や環境に配慮した生活を心がけていく必要があると思いました。日常生活でも意識していけば必ずこの状況を変えることができると思いました。

最後に、このツアーに関わったすべての方々に感謝の気持ちを忘れません。本当にありがとうございました。

松村　春華（社会学部　２年次生）

今でも、あの津波の映像を見た12年前のことは鮮明に覚えている。今回は、自分の肌で今の福島を感じたいと思い、ツアーに参加した。

震災遺構である請戸小学校の訪問は、私にとって、ツアー中最初に津波の威力を実感した場所として、特に印象に残った。また、住民が避難したまま帰れていない、夜ノ森地区の住宅街を歩くなかで私は、原発事故の残酷さを痛感した。

あの日から12年経った今、3.11の出来事を、もう“終わったもの”と考えている人も多いのではないか。しかし、人が戻らない町、あの日に壊れたままの建物、処分場が決まっていない放射性廃棄物、これから始まる原発の処理水の放出、そして未だ癒えていない人々の心。福島の人達は、3.11の出来事と12年間ずっと向き合い続けている。ツアー中、色んな方から貴重なお話を聞き、福島を肌で感じ、とても濃い５日間を過ごしたからこそ知った福島の人の思いや福島の“今”を、これから周りに伝えていきたい。

谷村　拓郎（政策学部　２年次生）

阿部農園では、東日本大震災が原因で引き起こされた原子力発電事故によって、JA ふくしまから「木の皮を削り取って除染するように」と指示され、福島市農業振興会からは果樹園の表土を5cm 削り取って除染することを勧められた。除染作業にか

かった費用はあまりにも高額であった。汚染土は7年間農園の地中で保管された。

南相馬市社会福祉協議会の方々との交流会では、高齢者の体験をし、災害からの避難は困難であることを実感した。

浪江町にある請戸小学校は沿岸から300m に位置している。地震発生当時、教員の迅速の判断がその時校舎にいた生徒82名の命を救った。教頭先生は大平山へ避難せず、学校に待機し、児童を迎えに来る保護者に対し避難するように呼び掛けた。

原発事故からの避難では、高齢者や障害者の避難が困難になり、避難所に辿り着いても先に到着している健康的な者や避難所から近い者がいるため、不便な場所で過ごさなければならなくなる。

また、18歳以下の子供約38万名を対象に被爆による甲状腺がんの検査を行ったところ、約300名が甲状腺がんの疑いであると診断された。しかし、県や国は放射能が原因ではないと反論している。

濱野　晃岐（政策学部　２年次生）

今回のツアーでは、本当にたくさんのことを知ることができた。その中でも強く感じたことは、実際に現地に訪れることの意味だった。その土地に立って自分の目に映る光景は、画面越しに見るものとは全く違う。インターネットの情報だけでそのことを知った気でいた自分が恥ずかしくなるくらい、知らなかったことだらけだった。福島の現状を視察しに行くツアーではあるが、実際に行ってみると福島のことだけでなく、もっと大切なことを学ぶことができたと思う。

現地の人のお話を聞くことの大切さ、実際に自分の目で見て感じることの大切さ、同じ志を持つ仲間と意見交換をすることの大切さ。これらのことは今後、何をするにしても忘れてはならないし、これらを大学生のうちに経験できて良かったと思う。

髭右近　裕彬（政策学部　２年次生）

「知っているからこそできることがある」ということを深く認識しました。自然災害、防災、原発、原発事故こういったことは積極的に知ろうとしないとおざなりになってしまうことではないでしょうか。私は11年という歳月が経った今、昔の出来事として捉えていました。しかし、スタディツアーに参加後は決して終わることのない、今も未来も続いていくものでした。

生きているうえでもっと勉強したいなと考えたとき、具体的には何を？と思ったときに、福島について知っておくべきではないかと私は思います。そういった話題が出たとき、ちょっと話せる自分になることで、記憶から風化してしまうことを防げるのではないでしょうか。また、日頃から意識することで防災について意識できることに加えて、他の時事とも関連させて考えることができるようになります。

私は、福島の皆様方のお話を聞かせていただいたことで、日頃から考える人間になれたと自負しています。

三枝　亜伽莉（農学部　２年次生）

私は、このスタディツアーで印象に残ったことがあります。それはモヤモヤを大切にするということです。このスタディツアーでは震災のこと、避難生活、原発事故のことなどたくさんのことを学びました。お話を聞きながら矛盾している人間のことを考え、どうして、なんで、とたくさんのモヤモヤを見つけました。このモヤモヤは生きているうちは消えないと思いますが、しっかりと受け止め、考え続けて、震災や防災についてしっかり勉強して、後世に伝え続けなければならないと強く思いました。いつどこで起こってもおかしくない災害を、自分たちがどれほど危険な状況下にいるかしっかりと認識し、防災することが大切です。私は、福島で貴重なお話してくださったみなさんの想いを無駄にはしないし、勉強し続けて伝え続けていきたいです。

岩崎　琉（文学部　１年次生）

私は、福島スタディツアーがより深く社会問題について考えられる機会だと考え、このプログラムに参加しました。実際に、津波・原発の被害に遭った地域に赴き、フィールドワークを行うことで、福島の抱える問題を他人事から自分事にすることができました。また、津波の被害にあった小学校や、原発の被害にあった農園、帰還困難区域に訪問し、改めて東日本大震災の被害の大きさを認識させられました。そして、このプログラムに参加し、防災意識の大切さを学べたと思います。実際に、避難訓練を繰り返し行っていた学校では、全員が無事避難していました。

今回のツアーに参加して、今起きている社会問題について目を背けないことの大切さを知れて良かったです。

木部　美沙紀（社会学部　１年次生）

私は、実際に見たからこそ得られるものがあるのではないかと思い、今回の福島スタディツアーに参加した。特に３つプログラムが印象に残っている。

１つ目は、うつくしまブランチの掃部郁子さんの「モヤモヤしながら強く生きてほしい」という言葉である。モヤモヤを忘れる、解決するのではなく、考え続けることで考えが深めることが大切だと考える。

２つ目は、震災遺構浪江町立請戸小学校である。そこで、津波の恐ろしさを改めて感じさせられた。常に意識し、体力作りをすることで全員無事に避難という結果につながったと考える。

３つ目は、Ｆスタディツアーである。実際に富岡町を歩くと、12年間時が止まったようであり、空き巣によって被害が拡大していることに衝撃を受けた。今回のツアーで、常に震災が起きた時、どう動くのか、どう連絡し合うのか話し合い、準備すること、そして、人に伝えていくことが大切だと考える。

蔵本　千優（社会学部　１年次生）

「福島」を直接見て、被害の大きさや地域の方々が感じたに違いない怖さを想像した。校舎から海が見えるほどの距離にある請戸小学校は特に、津波の爪痕が生々しく残っていて、壁が津波によって破壊されて吹き抜けになった教室、天井の鉄骨の間に挟まった、誰かの本を見た時は本当に言葉が出なかった。

生徒たちが避難する時、周囲の大人は自分たちも逃げなければならない中、子ども達に海を見せないように注意していたそうだ。それは、子ども達に津波というトラウマをこれから生きていく上で背負わせるわけにはいかないという思いからの行動だと聞き、必死に避難する子ども達が抱いていた怖さと、厳しいこれからの現実を感じていた大人が抱いていた怖さの差があったことを知った。

東日本大震災は同じ瞬間に起こっていても、そこで受けた被害の大きさ、感じた怖さはきっと違う。東日本大震災は一括りにすることはできない、してはいけないものだと改めて感じた。

萩原　千絵（社会学部　１年次生）

人の気配がなく、数え切れない数のソーラーパネルが設置され、どこまでも続く更地。スタディツアーで目の当たりにした被災地の現状や話を聞いて、災害をあまりにも無知で他人事と捉えていたことに気づかされた。近い将来、必ず発生すると言われている南海トラフ地震の発生が懸念され、関西圏にも大きな被害をもたらすことが予測されている。巨大地震が発生すれば東日本大震災のような原発事故が発生する可能性も高くなる。もし実際に起これば他人事ではなくなり、救えるはずの命まで失ってしまう。どのような災害であれ、災害を自分事として考えることの大切さを学んだ。

被災地で学んだことを自分の言葉で表現することは難しく、感情も複雑でまとめることができない。本当は口に出したくない、でも二度とあの日のことが起こってほしくないという思いから、震災の教訓や記憶をお話してくださった方々が伝えてくれた、日頃から災害についての意識を持つこと、想定することの大切さを伝えたい。

三神　有織（社会学部　１年次生）

このツアーに参加したことで、原発事故について正しく理解するには実際に足を運ばないと得られない学びがあった。富岡町夜の森地区で、更地や震災当時のままの家屋を見て、ここに生活の営みがあったとは考え難かった。行く前までは津波による影響が大きかったと思っていた。しかし、新築のままの家を見たときに帰りたくても帰ることができない現実があるのだと分かった。

原子力災害考証館 furusato は博物館のように学芸員の方が伝える場ではなく、当事者自身がアップデートされていると知った。ここで見たものから思いを形にすることは非常に深い意味があると思った。

伝承することは今を生きる人へ思いを繋ぎ、自分事として捉えるきっかけになる。災害に対する意識づくりをしておくことで自分の命、周りにいる人のことも考えることができると思う。東日本大震災による原発事故の記憶を風化させないために家族や友人と語り合う時間が大切だと考える。

4. コーディネーター所感

体験学習プログラムの特徴は、参加する学生の学部や学年が多様であることだと思います。日頃学んでいることが異なる学生が集うことによって、同じ景色を見たり同じ話を聴いたりしても、印象に残ることや注目することが異なったりします。多様な価値観が集まり、語り合うことによって互いに影響し合っていたように思います。あらためて、現場を訪れる事、顔を合わせて話をすることの大切さを感じました。

また、今回のツアーでは、４月で避難指示が解除となった富岡町の夜ノ森地区を訪問しました。12年前のまま残るその地域の様子は、衝撃的でした。引率という立場での参加ですが、私自身も見て、聴いて、言葉にできない感情に包まれました。そして、たくさんの方に震災のこと、原発事故のこと、現在のことや未来に向けたお話を伺いました。自分自身の生活、生き方について改めて考える時間となりました。まだまだ整理がつかないこともありますが、学び考え続けていきたいと思います。

このスタディツアーは、多くの方のご協力のもと実施できています。お忙しい中、ご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

〈報告者：國實 紗登美
（瀬田キャンパス コーディネーター）〉

事　業　名	2022年度国内体験学習プログラム　福島スタディツアー・オンラインプログラム
実施日時	2023年２月７日（火）13時30分～15時20分　オンライン
参加人数	ライブ参加34名（後日、オンデマンドにて配信）
協力団体	team 汐笑（ゆうしょう）プロジェクト代表・大熊未来塾

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センターは、実際に福島に赴いて多様な立場の方々からお話を聴き、福島の今について学ぶ『福島スタディツアー』を2015年度から実施してきました。学びと気づきがとても多いツアーですが、実際に福島を訪問するため、希望する人全員に参加してもらうことが出来ません。そこで、このツアーの事前学習会の一部をツアー参加者以外の方も広く参加できる『福島スタディツアー・オンラインプログラム』として開催しました。

2. 概要

【講師・内容】

東京電力福島第一原子力発電所の事故により町内全域に避難指示が出され、10年以上の月日が経った現在も、未だに町内に「帰還困難区域」が残っている福島県大熊町とオンラインでつなぎながら、「大熊町から、未来を考える」をコンセプトに活動されている team 汐笑（ゆうしょう）プロジェクト代表・大熊未来塾塾長の木村紀夫さんに、「もうひとつの福島再生を考える」をテーマでお話をいただきました。

●プログラムの流れ

・木村さんの伝承活動をまとめた動画視聴
・大熊町立熊町小学校からオンラインでツアースタート（熊町小学校→熊川区公民館→栽培漁業センター→自宅跡→捜索現場）、町を移動しながら、お話をしていただく
・質疑応答
・放課後タイム（時間内に出来なかった質問などを行う）

3. 参加者の声・得られた効果など

・復興の在り方、防災への意識、そして、今を生きる自分自身の生活について深く考える機会となりました。
・原子力発電所の事故により、当時のまま残されている小学校を見た時は、まだ当時のまま時が止まっているんだ、と進んでいない時間が辛いものであるように感じました。しかし、木村さんから、「ゆうなさんの当時の様子が分かるから、そのままで残している」ということを聞き、変わっていく町の中で唯一変わらないものが小学校にあるんだということを知り、当時のまま残されているということの意味をそこで実感しました。
・木村さんのご活動は以前から存じ上げていましたが、リアルタイムでお話を聞いたのは初めてでした。深い思考から紡ぎ出される一つ一つの言葉が胸に迫りました。ありがとうございました。また、スマホによる Zoom 現場実況と PowerPoint を効果的に組み合わせたご報告は実にスムーズで、

時間をかけて緻密なご準備をしていただいたことがよく分かりました。

4. コーディネーター所感

今回のお話では、福島県大熊町に生まれ育った木村さんに、東日本大震災被災してから現在に至るまでの経験と、その体験の中からの気づきについて、多岐にわたった視点からお話していただきました。時間の制限があるため、エピソードをじっくりと深堀して聞くことはできませんでしたが、アンケートに寄せられた意見には、「自分達の何気ない生活も誰かの犠牲の上で成り立っているのかもしれないと気づいた」「自分たちの無関心によって引き起こされている現実について考えた」「復興とは何だろう」など、自分の中で内省し、思い悩む言葉がつづられていました。学生達にとって自分自身の足元を見直す機会となったようです。

〈報告者：竹田 純子
（深草キャンパスコーディネーター）〉

事　業　名	春季体験学習プログラム報告会　～知ることから始めるスタディツアー～
実施日程	国内体験学習プログラム報告会： ①2023年４月24日（木）17時45分～19時15分 ②2023年４月28日（金）17時45分～19時15分 海外体験学習プログラム報告会： ③2023年５月８日（月）12時45分～13時15分 展示会： ④2023年５月９日（火）～５月12日（金）12時30分～13時30分
実施場所	①深草キャンパス和顔館アクティビティホール＆オンライン ②瀬田キャンパス２号館106教室＆オンライン ③オンライン ④深草キャンパス成就館1階 En Square1（５月９日（月）・10日（火）） 瀬田キャンパスボランティア･NPO 活動センター前（５月11日（水）･12日（木））
参加人数	国内体験学習プログラム報告会：70名（対面・オンラインの２日間合計） 海外体験学習プログラム報告会：27名 展示会：95名（展示会全日程合計）

1. 経緯・目的

参加した学生がどのような事を学び、考え、今後の活動にどう活かしていくのかを発表する機会を作り、参加者自身の整理や、プログラムに参加していない学生に学びを共有する事を目的に報告会を行いました。

より多くの学生が参加出来るようにするため、全ての報告会でオンラインを併用し、対面で実施の際は深草・瀬田両キャンパスで実施しました。

2. 概要

下記２つのプログラムに参加した学生が、それぞれの体験を通じ、学んだ事・考えた事を報告しました。プログラムに参加した学生以外に、プログラムに関心を持つ学生や、今回のスタディツアーに協力いただいた団体の方々にもご参加いただきました。

また、両プログラムに参加した学生の事後レポートを１冊のレポート集にまとめ、配付しました。

【報告プログラム】

（1）春季国内体験学習プログラム

『福島スタディツアー
～福島の「今」を見､福島をいきる人々の「言葉」聴き、そして「自分」を見つめる～』

③春季海外体験学習プログラム

『アフガニスタンの今と未来。～日本にいる私たちに出来る事とは？～』

3. コーディネーター所感

国内体験学習プログラムは、深草・瀬田両キャンパスで報告会を実施しました。報告する内容は、参加学生で考えます。福島で見て聴いて感じたことに加え、そこで気づいた大切だと感じたこと、備えないといけないことなどについても伝えてくれました。報告会に向けて準備をしたことで、学びがより深まったことと思います。

海外体験学習プログラムでは、当初報告会のみを予定していましたが、事後振り返り会で、参加者の中からアフガニスタン女性の作成した刺繍の良さを伝えたいという声が挙がりました。そこでプログラムにご協力いただいたEJAAD JAPANから刺繍作品をお借りして展示会を実施しました。

どちらのプログラムも学生達が自主的に、学んだ事をより多くの人に伝えたいという想いが形になった報告となりました。今回得た学びがひとりでも多くの人に伝わり、社会を動かす一歩になればと思います。

＜報告者：吉田 裕貴
（深草キャンパス コーディネーター）〉